



TITLE:

希臘神話物語(三)

AUTHOR(S):

荒木, 千里

---

CITATION:

荒木, 千里. 希臘神話物語(三). 天界 1925, 5(51): 112-118

ISSUE DATE:

1925-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160235>

RIGHT:

あらう。この暗黒星雲の何者なるか、充分に判らないのであるが、もしそれが塵埃様の（こゝに塵埃様のものゝ譯したの dust と言ふ語でこれ、瓦斯狀でなく、つぶ／＼になつてゐるものゝの意で譯者の考へでは、これは、隕石の大集團であらうと思ふ）大星雲であつたとするならば、その初期に於てはその周圍に近き部分では、可成強い光の吸収が行なはれるわけでこの状態は内部に集中した核が可成強く灼熱して來るまでは、續くであらう。この内部分に出來た核が非常に強く灼熱して來れば従つて周圍の方の隕石も其の熱によつて蒸發するに到る。かくして星は光り始めるであらう。然しかくして一度周圍に光を輻射しはじめるこゝ、その輻射が釣合以上に行なはれ過ぎて、幾分ひえて來るであらうし、かくして或は

## 希臘神話物語 (三)

### (十一) ベスタ

プルカーヌスが破壊的な恐しい焔を象徵してゐるに對し、ベスタは日常人間がその生活に用ふる穩かな有用な火を象徵してゐる。火を用ふるこゝを教へた者はこのベスタである。

蒸發し、或は凝結し、それが週期的になつて、長週期變光星の現象を呈するであらう。前にも言つた様にこの種の星は強いチタニウムバンドを示すが、これ等の星が次第に收縮して温度が高くなるにつれて、チタニウムのバンドは次第に弱くなりK型の星からG型の星へ進むのであらう。

扨てまた比較的質量の大きな星では、チタニウム、バンドが消へるやうな温度に到達した場合に、S型のスペクトラムを呈するであらう。又小數な或る星では、少し違つた化學的合成が行なわれN型星を作り、漸時温度が高くなるにつれてG型星へ進化して行くであらうし。こゝに到つて特種な性質は失つて他の星と全く同じ様になる。(荒木俊馬譯)

(Publications of A. S. of the Pacific, Vol. 36 pages 37—105).

## 荒木千里

さればこのベスタの祭壇には希臘人は火を捧げた。

ベスタの殿堂には聖いこの火が燃へてゐる爲に、希臘人はその殿堂の建物そのものを聖火を守る者として崇拜した。家を建てる事を教へたのも矢張りベスタである。この傳説によれば家を建てる事は人間が其處に住む爲であるよりも其中に

あるベスタの聖火を守る爲であつたことを考へられるのである。

ベスタは希臘の神々の中で最も人間の日常生活に親しいものといへる。食物を保存し、調理することの出来るのも一重にベスタのお蔭である。考へる人々がこの女神に如何に感謝を捧げてゐたかといふことがわかる。彼等ははこの女神の侍女として數人の若き尼を捧げて神の御用をつとめさせてゐた。

又彼女は淫亂な希臘の神の中にあつて、珍しい潔癖な女神であつた。彼女はジュピターの首にかけて決して一生結婚しないことを誓つたのである。遂にその誓の如く彼女は結婚しなかつた。男女を問はず結婚しないといふことは希臘人の頭には極めて不自然なことを思はれたに相違ない。その不自然を冒して禁慾生活を通したベスタは彼等の尊崇の念を彌々高めたのであらう。禁慾といふことは東西何れの國を問はず神聖なことだと思はれたからである。

ベスタは實に希臘の神々の中に於ける一つの異例である。

## (十二) メルクール

メルクルは神々の間に迅速なる使者としてその役をつとめてゐた。彼はすべての行動に於て敏活であり、同時に又狡猾であり、巧言令色に少きの神である。手癖の悪い彼はよく他の神のものを偷取した。然し其犯行があまりに敏捷であり氣紛れであつた爲、被害者もたゞ笑つてこれを許してゐた。

希臘人の幻想は實にかゝる不都合な神をさへ神として尊敬してゐたのである。彼等の神は決して理智から生れた神ではなくて幻想の生んだ神だつたからである。希臘人は聲が低く聞くににくい場合に彼等獨特の美しい表現法を用ひた、即ち『その言葉には翅がない』と。翅の生えて飛ぶ様な輕い言葉がメルクルの言葉であつた。従つてメルクルの祭壇には希臘人は動物の舌を捧げた。又この神の咽喉を潤する爲に彼等は蜂蜜と牛乳を供へた。

彼はその舌によつて神々の不和を解き、争ひを和けることに他の追及を許さぬ技倆を發揮してゐた。

彼のこの性質は生れ落ちて間もない嬰兒の時代から既に著しかつた。幼い彼は或る時二匹の蛇が鎌首を振つて相争ふのを見て、彼の金の杖でたゞつけてやつた。するに二匹の蛇は忽ち怒を忘れ互に絡みあつたまゝ彼の杖に匍ひ上つてきて、その杖の頂で彼等の頭は一つに合した。それは永久に伸直りをする彼等の心を表したものであつた。このメルクルの蛇の杖こそは和解と平和の象徴として廣く一般に知られてゐるものである。

私は彼の幼時の逸話をも一つここに紹介したいと思ふ。

メルクルはユーノが眠つてゐる間にジュピターが可愛らしいマヤに小暗い洞穴の中で生ました子である。彼が生れたのは朝であつた。晝にはもう彼は自分で發明した琵琶を弾じ

夕方には、自分の家を逃げ出してアポロの牛を盗んでゐた。彼の生長はかくも迅速であつた。

その日の晝彼が搖籃を匍ひ出して園のミこころに來た時大きな龜が彼の方にやつて來た。それを見るミ彼はあの龜の甲を取つたら立派な樂器が出来るだらうと思つた『もし龜さん、もしお前が死んでくれたならお前のそのいやな聲が本當に立派な歌の音色を出す様になるんだヨ。一つ死んで見ないか』狡そうに彼は話しかけた。愚かな龜は自分の聲の爲に死を承諾した。彼は龜の死體から甲を取つてそれに糸を張り、琵琶をつくつた。そして彼は聲を張りあげ、琵琶の音を合はして神々の歌を歌つた。

その夕、日が海に沈んでから、彼は神々の家畜を飼つてゐる山々に上つて行つた。そして彼はアポロの飼牛を五十頭を偷み山や谷を越えて連れ去つて行つた。狡猾な彼は様々の狡智を弄して巧に犯跡をくらます工夫をしながら歩いて行つた。もしも野に穴を堀つてゐた一人の老人が彼の姿を見てゐなかつたら彼の犯行は恐らく誰も知らなかつたであらう。

彼はアルフォイの流に來てその中の二頭を殺し火にあぶつて食つて仕舞つた、彼は火を消しその灰を砂に埋め、牛の足跡を消す爲に用ひた木の葉の草履を河の中に投げ込んだ。最早彼の犯行の證據は何も残つてゐないミ信じて、月光を踏んでそのまゝ、母の家に歸り再び搖籃の中に這入つて襁褓を着け

何食はぬ顔をして眠つてゐた。

現場を目撃してゐた老人から告げられ、火の様に怒つてアポロが怒鳴り込んで來た時、盜人は琵琶を抱きながら、平和に狸寝入りしてゐた。

アポロは盗んだ牛をかくしてゐる場所を教へなければタルタルスにぶち込むぞ脅した。子供は審しげな眼を見張つて答へた『ラトナの息子さん、貴君は何んて恐しい口の利き方をなさるだらう。私はやつミ昨日生れたばかりの子供ではありませんか。私はそんな牛などより玩具の方がずつミ好きですよ。野山を駆け廻るよりもお母さんの膝の上で眠つてゐる方がきれだけいゝかわかりやしない。牛を盗むなんてそんな荒い仕事をしたら私の足は血まみれになつて仕舞ひます。牛共は自分勝手に逃げ出したんでせう。私は盜人のこゝは知りませんヨ。ジュピターの首にかけて誓つてもいい』二人はその争ひを判いて貰ふ爲にジュピターの前に出た。先づアポロはこの子供が自分で他人の牛を偷んで居ながら白ばくれてゐるから問ひ正してくれミ訴へた。メルクルは搖籃の中に立つて『ごうしてそんな荒い大人でも出来ない様な仕事がこの私に出来るのですか、お父さんだけは他の誰が何んミ疑つてもお分りになるでせう。私は昨夜はグツスリ氣持よく眠つてゐました。私にはまだ私の家の園さえ越すこゝは出来ませんヨ。お父さん私には決して罪はないでせう』ミ。まゝ。

こしやかに述べたてた。ジュピターは未だこんな幼い癖にこれほご智恵の廻る奴はそう何人もあるもんじやないと思つてメルクルが偷んだことは知つてゐたけれども、たゞ微笑したそして穩かに決して罰を食すのじやないから牛を隠してゐる場所を教へてやれと云つた。彼が遂に父の命に従つてその場所を教へた時、もうアポロも怒を和けて、もしメルクルが琵琶を弾いて聞かしたら仲直りをしやうと云つた。やがて幼児が美しい調べで彼の琵琶を弾いた時、彼はもうその音に恍惚となつて、この子供が大好きになつてゐた。『牛五十頭位盗られてもお前のその音楽を聞けばもうこの俺には不服はない』淡泊なアポロはかう云つて快くその子供を許してしまつた。メルクルはアポロにその琵琶を贈つた。アポロは有頂天になつて、この琵琶だけは今後決して偷まない様ステイツクス(三途の川)にかけて誓つてくれてその子供に念を押した。アポロはメルクルにすべての不和を解く金の杖を贈つた。この杖が前に述べた杖なのである。二人は手に手をもつてオリンプに歸つた。ジュピターはこの二人の和解を心からよろこんだ。

盗みをするこゝろ、強者をも制する敏活を狡智とはメルクルが人間に教へたものである。

彼は神々の使者としての外又迷へる者の道案内として神々や人間を導いた。彼はオリンプからブルトーの國に下つて行

つては、死者の靈魂を死の住み家なる夜見の國に彼の杖を以て導いた。

彼は神々の間に、油斷のならない奴だが、使ひどころのあつて可愛い奴だとして重寶がられてゐたのである。

### (十二) バックス(ディオニソス)

人間の母から生れたに係らずバックスはヘルクレスは天上に上つて神々のコーラスに加はることを許されてゐた。ヘルクレスは様々の勇しい功蹟によつてこの榮譽を贏ち得たのだけれどもバックスは何等そんな手續を踏まず直接に神々の列に上つたものである。

バックスは生命の内的充實を象徴してゐる神である。彼は感激多き享樂と快き陶醉をその泡立つ盃から神々に贈つた神である。彼は酒の神なのである。

彼はツエレスの如く極めて穩和有用な性質の神である。人を罰するこゝろ多き希臘の神々の中にあつて、彼の如く人を樂しましてよろこぶ神は珍しい。

既に述べた如く彼の出生からして奇抜なものであつた。彼の母は僭越な望みの爲にジュピターの電閃の犠牲となつたけれども、彼だけはジュピターに引きさられて雷神の腰の中にかくされ月満ちてジュピターの腰から生れたものである。若きバックスはメルクルの手によつてこれを育つべく妖精達

に渡された。何處の島何處の國もバックスを迎ふることを争つて歡迎した。彼は幼にして既にかくも人望のある神であつた。幼い彼は既に微醺を帶べるかの如くうさ／＼眠る習慣があつた。

トラチヤの王リクルグスはバックスの召使共をニサの山に追ひ上げて手斧で殺して仕舞つた。バックスはそれを見るに恐怖の爲に海の中に飛び込んだ。海には優しいテチスが居た。彼女はバックスを抱き取つて救けてくれた。テチスは以前にもブルカースがジュピターの爲に天から投げ下された時に一時自分の家に置いてやつたことがあつた。

バックスはこれ程大人なしい氣の弱い神であつた。然しリクルグス王は神々によつてその罰として盲目にされた。そして間もなく死んでしまつた。

又ある時海賊共が幼いバックスを皇子だゝ勸違ひして、人質にまつて一儲け仕様を考へ、彼を誘拐して行つて縛つた。するに不思議やバックスの身體に巻きつけられた繩は自づこ解けて、その海賊船の中には香りよき葡萄酒が溢れて來た。又突然船の中から葡萄樹が生えて來て、橋に巻きつきつゝ帆を越ゆるばかりに生ひ繁り、房々葡萄の房を實らしその蔓はすべての舵に巻きついた。海賊共が驚きの爲に呆然としてゐる時、見よ甲板には恐るべき一頭の獅子が姿をあらわし怒れる眼を以つて彼を睨みつけた。海賊は顔色を失ひ逃れんこ

するも逃れるところなく、遂に海中に身を投じた。海に入るや否や彼等の身體は直に海豚の姿に變つて仕舞つた。獅子はバックスのお氣に入りの従者なのである。

バックスは又印度に旅行したことがあつた。多勢の男女を引き連れて賑かに騒ぎながら、ガンガ河の近く迄も遠征して行つた。そして到るころ人民に酒を造り樂しむことを教へた。それは丁度酒の宣傳旅行の様なものであつた。

バックスの姿は永久に幼い子供である。恐らく酒飲む人の心は子供の様に單純に無邪氣になる爲であらう。彼は自分の車を獅子と虎とに曳かせながら、車の上にウトウトと快く居眠りつゝ、供人の囁す笛太鼓の音を夢現の如く聞き流して山々谷々を越へ、更に世界中旅行して歩いたのである。頗る陽氣な無邪氣な神である。

三年の月日を経て彼の世界旅行は終つた。その紀念の爲に希臘人は三年毎にバックスの爲にお祭をした。その祭は山も谷も跳り出す位愉快な賑かな祭だつたさうである。

バックスに侍へる尼達は亂れ髪を風に吹かせながら、太鼓をたたき『エホー、バックス、エホー』と叫んで山々をあるき廻るのが仕事であつた。尼達が手に持つてゐる美しいリボンのついた葡萄の杖はバックスの酒旅行の記念ださうである。この尼達はバツカンチンと呼ばれて人間以上の勢力を有つたものであつた。希臘人等はバツカンチンが山の頂で酔ひしれ

たまゝ倒れて、雪の中に眠つてゐるのをよく見掛けたこいふ  
そして希の臘詩人は『酒の神のお伴になるのは實際結構だナ  
ー』と願つてゐる。

バックスのお伴をしてゐる者は嫌な老衰をも歡樂に酔夢の  
中に迎へて行く。酔の象徴たる白髪のジレンが首をうな垂れ  
てウト／＼しながら驢馬に跨つてゐる姿も滑稽ではあるが極  
めて樂天的なものである。酔は老を忘れしめるからであらう  
ある時二人の牧童が酔つ拂つて居眠りしてゐるジレンの姿  
を見付けた。神々に對して無力な人間も神々が眠つてゐる時  
にはこれを縛ることを許されてゐた。牧童達はジレンを縛つ  
た。ジレンが目覺した時牧童達は繩を解いてやる代りに歌  
を歌つてくれといつた。ジレンは朗らかに歌ひ初めた。神酒  
にぬらされた彼の唇から響いてくる歌は微妙極まるものであつ  
た。牧童達は恍惚となつて仕舞つた。

ジレンはバックスの子分の神である。

#### (十四) プルトー

プルトーはジュピターの兄弟である。地下の王國を支配し  
てゐる神である。彼は地下のジュピターと稱せられてゐた。  
地下の國は暗黒な死人の國である。此の世に對するあの世で  
ある。彼は二又の黒檀の杖を握り鐵の冠を載いて陰氣な王坐  
に坐つてゐる。彼のこの冠はこれを冠る者の姿を見えなくし

たこいふ不思議な冠であつた。

プルトーに關連したツエレスの娘プロセルピナの悲しい物  
語は既に述べた。このプロセルピナは後でプルトーの妻にな  
つて陰氣な中にも仲よく暮してゐたこいふ。

浮世の生命を失つた人々は唯一人トボ／＼、或はメルク  
ールに案内されて地獄の近く迄來る。そこで彼等は朽ち果て  
たほろ船に乗つて地獄に渡る爲に河を越した。その河を一度  
越したものは二度と再び歸つてくることは出來ないのであつ  
た。地下の國には色々の河があつた。死人の嘆息の音をたて  
ゝ流るゝアヘロン、死人の呻き聲がその川瀬の音だこいふコ  
チッス、焔の水が流れてゐるピリフレグトン。それから今迄  
既に何度も名を書いたスチツクス、なき皆陰慘な無氣味な河  
である。ただレーテこいふ河は優しい河であつた。この河の  
水を飲めば地下の盲者達は生前の心配苦勞をすっかり忘れる  
ことが出來た。然し地獄に渡る河は此等の河ではない。それ  
は眞黒な泥水の流れてゐる河である。船頭のシャロンが泥船  
に桿さして盲者達を地獄に渡した。盲者達はこの年老いた船  
頭にくらゐる銀貨を渡貨として支拂はなければならなかつ  
た。地獄の盲者達は影の如く浮いたり消えたりして地下を追  
遙してゐた。

ウリセスが或時日神の娘ツイルケの命令によつて地獄を訪  
れたことがあつた。洞穴の周圍に年若き男女の盲者や戦死し

た男達や浮世の辛苦を重ねた苦勞の魂なきがウヨ／＼してゐた。その間から彼の母が姿をあらわした。彼が嬉しさのあまり抱擁し様とした時母は退いて『死んだ人間の魂は夢の様なものですヨ。手を觸れてはいけません』と教へた。然しアガメルモンの魂はこれに反して嬉し相にユリセメの方に手を伸した。彼が握手をした時、盲者の手は全く力のない空氣に握手する様なものだつたといふ。又彼は又アヒレスの魂に遭つて彼の生前の武勇を賞し且地下に來ても盲者達の牛耳を執つてゐる彼を讃めてやつた。するミアヒレスは答へて云つた。

『いくら盲者の間で威張つて仕方はない。俺はかなふことなら傭人になつてもいゝから、も一度浮世の空氣が吸つてみたい』とこぼした。この世界にはヘルクレスの魂も居た。ヘルクレスはその武勇によつて不死を得た男であるがさういふわけがこの世界に迷ふてゐたのである。

エネアスが父に遭ふ爲に地獄を訪れた時にはシャロンの渡を渡るや否や、浮世の光を仰ぐこともなく死んだ嬰兒達の泣き叫ぶ聲が暗を劈いて響いたといふ。又無實の罪で殺された者や自殺した連中も情ない顔をしてそのあたりにウロ／＼してゐた。彼等は皆浮世に出られるものなら、こんな貪乏でも苦役でも甘んずるゝ嘆いてゐた相である。

更に進んで行くゝ悲しき戀故に身を亡した若い男女の居る嘆きの野があつた。その先には左手にタルタルスがあり右手

にエリジユムがあつた。タルタルスは神に對して不敬な罪を犯したものゝ墜ちるゝところであり、エリジユムは浮世で罪を犯したこゝのなない聖者達の行く所謂極樂なのである。

プルトーはかゝる陰氣な國の支配者なのである。オリンピックに住んでゐる神々の生活に比してまるで別世界である。従つてプルトーと他の神々の交渉も左程深くなかつた。プルトーはむしろ神々から敬遠された形であつた。

\* \* \* \* \*

希臘神話にあらはれた直系の神々の物語は最早大體述べた讀者諸君もほゞみんな千變一律な神々の物語にも最早退屈せられたこゝであらうし、作者も亦少からず執筆に倦みたから、一先づこゝに筆を擱かうと思ふ。又機會があれば他の神々について書くこゝがあるであらう。

(一九二五、一、五) (完)

## 口繪説明

白鳥座にあり有名な星雲である。よく見て御覽、その形が丁度北亞米利加洲に似てゐるでせう、さう言ふ名前がついた所以です。